当別町 140 年特別企画

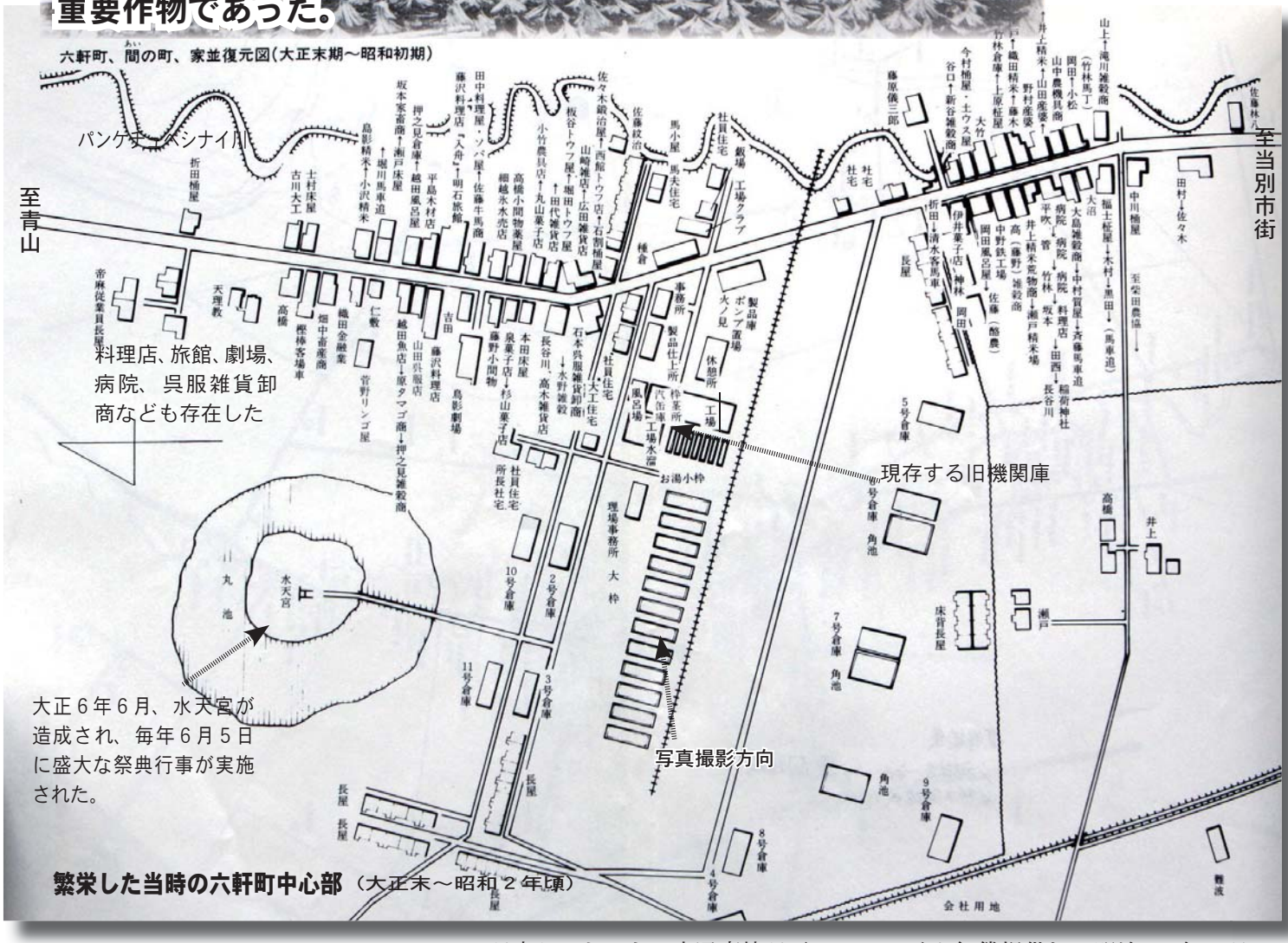
第６話 亜麻産業の今昔物語

六軒町に開設された製線工場全景
右手煙突の建物が工場でその左端の建物が現存する機関庫
（写真：百年の歩みから　大正１３年８月）

一面に唐傘状に置かれた亜麻は前年収穫したもので、池に２週間程度沈めた後、乾燥させている。このあと工場の機械で茎と皮に分離される。

亜麻栽培は国策で始められた。

化学繊維が登場するまで、軍需をはじめ亜麻は重要作物であった。



繁栄した当時の六軒町中心部（大正末～昭和２年頃）

①六軒町に開設の製線工場

開墾から 20 年はソバ、麦、豆、ヒエなどの食糧の自給が先決でしたが，明治７年に大麻の栽培が始まると、当時唯一の換金作物として急速に作付けが増えていきました。その理由は土地が適していたことと、開拓使の奨励作物で価格が良かったこと、交通事情が悪い時代に運びやすかったことでした。その後、明治 22 年からは亜麻の栽培も始まります。

当別村は北海道製麻株式会社（後に帝国製麻株式会社に吸収）と亜麻耕作の特約を結び、伊達氏は本業奨励のため、工場用地として所有する六軒町の土地 27.7 ヘクタールを無償提供し、明治 27 年６月 10 日、製線工場が誕生しました。当時の村の基幹産業でシンボルともなった工場は 100 人以上の従業員を数えました。

伊達家第３次移住（明治 12 年）により六軒の入植で始まったこの地区は、現在の本町市街地を越える賑わいが出現したのです。

②亜麻とは・・・

亜麻は一年草で、原産地は小アジア地方、現在の主産地は、フランス北部・ベルギー・ロシア・東欧諸国及び中国など比較的寒い地方です。考古学者によれば、紀元前8,000年頃より世界文明発祥の地チグリス・ユーフラテス川でも栽培されており、人類が利用した最古の繊維素材です。

亜麻は麻（大麻）とは別なもので、茎からできる繊維は麻よりも柔らかく且つ強靭（羊毛の4倍、綿の2倍以上）です。リネンと呼ばれる上等な製品は、通気性や肌触りが良く女性の下着（ランジェリー）など、また,その他の繊維もテント生地など幅広く利用されました。大麻から作る生地にも強靭性、放熱性や抗菌作用、消臭力がありますが、国内の家庭用品質表示法では「麻」と表示されているのは亜麻と苧麻（からむし）のみです。

亜麻は北海道開拓の初期から導入され急速に広がり、道内に85カ所の亜麻工場ができました。特に明治時代の日清、日露戦争以降、軍隊での需要が増え、非常な好況を呈したのです。

③亜麻の作業

亜麻は連作障害があるため、同じ場所で続けて栽培できず、そのことから亜麻畑はどんどん広がっていきました。7月に収穫した亜麻は長さをそろえ25kgの大きさに束ねて出荷されました。会社はこれを買い入れ、倉庫に保管した後、翌年春、水温の上がった時期に池に漬けて腐らせました。茎と皮をはがれ易くするためで、1～2週間すると臭気を帯びた亜麻を池から引き上げ、唐笠状に拡げて乾燥させました。そのあと一時倉庫に保管し、随時工場へ持ち込んで茎と皮に分離させました。

会社従業員の様子
記録では100人ほどの従業員の内、女性もほぼ半数を占めていたという。若い人が多く家族も写っていると思われる。

④工場の労働と従業員の生活

女子従業員も重い亜麻の茎を池から引き上げたり男性と同様の仕事をこなしました。工場の勤務時間は午前7時から午後5時で休憩時間には子どものオムツを取り替えたり授乳する姿も見られました。従業員には6畳2間と2畳の台所、押入れ、玄関という間取りの住宅が無償で与えられました。大正14年、六軒町部落で一番早く電灯がともり、その珍しさに寝ることも忘れてながめていたといいます。会社では従業員の家族慰安のため旅行も実施していました。馬車を何十台も連ね早朝出発。望来の浜で海水浴を楽しむ日帰り旅行や観楓会もありましたが、一番の楽しみは製麻会社の水天宮祭でした。職工たちが総出でこしらえた山車（だし）と思い思いに趣向を凝らした仮装行列。この行列が六軒町から市街地までをその出来栄えを競いながらねり歩き、帰ってくる様は、村内随一の祭りでした。また楽器を愛好する職工も多く、会社も必要な楽器を与え楽団ができるなど、多彩な文化面もありました。

－ことに明治26年（他の資料では明治27年）、當別製線創立以来、大麻作の隆盛を来たし、其の収入の莫大なりしことにより順次、驕奢（きょうしゃ）の風を順至し是が結果、往々家産を傾くるものあるに至る。－（當別村沿革概要、明治41年、吾妻阿蘇男氏）

という記録からも大麻、亜麻の隆盛ぶりが伺えます。

驕奢（きょうしゃ）…おごっていて贅沢なこと

帝国製麻「水天宮」祭りでの仮装（大正14年6月5日）

鬼や牛若丸、洋傘を差した婦人など手の込んだ衣装で飾られている
この祭りは当時村一番の祭りであった（写真：百年のあゆみ）

⑤火災で焼失

昭和２年８月20日、昼休みの工場から原因不明の火災が発生。当時最新鋭の米国製ノーザン式ガソリンポンプ車（広報２月号で掲載）が直ちに出動、現場に到着したものの不運にもポンプ用のガソリンが無く、自転車により市街から取り寄せたときにはレンガ造りの機関庫の他はほとんど全焼していました。その後、工場は復興されること無く廃止され、職を失った職工たちは樺戸、琴似、月形の工場へ去っていきました。工場従業員のいなくなった六軒町では店じまいする商店も増え、工場のあった場所は売却されました。水や土が稲に適した土地柄ということもあり、売却された土地は全て水田となり、製線工場の記憶も薄れていきました。

亜麻の作付けの推移

年	号	面積ヘクタール	収穫量t
1897	明治30	482	1518
1910	明治43	200	720
1918	大正７	670	2010
1929	昭和４	212	407
1943	昭和18	224	446
1955	昭和30	68	189
1965	昭和40	49	170

⑥可憐な亜麻の花が時を越えて

今年２月、「美の里づくりコンクール」（農林水産省）において当別町亜麻生産組合（大塚利明組合長）が審査会特別賞を受賞しました。昭和40年頃までは全道各地で見られた亜麻栽培ですが、化学繊維の登場で、国内ではすっかり姿を消していました。近年、亜麻の油が持つ良質の栄養素に着目した企業が、栽培の歴史のある当別町に注目。町内の有志による試行錯誤の栽培を続けてきました。今では東裏地区をはじめとして薄紫色の亜麻畑が復活し、亜麻祭など地域のイベントも行われて札幌市民なども多く訪れるようになったことが認められたのです。

大成寺境内に残る製線工場慰霊碑（大正３年７月建立）には劣悪な労働条件のため、結核などで命をおとした44名の名前が刻まれています。

■参考文献
当別町史（1972年）
中央部落史百年の歩み（1978年）
とうべつ文庫13（2002年）
日本麻紡績協会ホームページ
■情報課広報広聴係
☎23－3069

インタビュー
亜麻復活に夢を！

平成14年亜麻の作付けが0.4ヘクタールから始まりました。当時、亜麻を利用した健康食品を作りたいと担当の方がこられ、熱心に亜麻のすばらしさを説明されました。自分が亜麻を作るきっかけは、誰も作っていない作物だったことです。栽培方法はすべて手探りのため、最初の数年は収穫があがらずあきらめかけました。健康食品の素材のため農薬は使えなく、雑草との闘いに疲れてしまうためです。しかし努力の甲斐があって収穫も軌道に乗り、亜麻畑にもだんだん人が訪れるようになり嬉しいです。経営面から見ると決して楽ではない亜麻ですが、花を見て分るとおり魅力のある作物です。昔、当別は亜麻で潤ったと聞きましたが、今、また町を賑わせる花に育てたいです。若い生産者を中心に、大規模ではなくても少しずつ亜麻の作付けを増やし、亜麻の見られる町と言われるよう頑張っていきたいです。

亜麻からできた製品

津崎弘樹 さん
（当別町亜麻生産組合副組合長）